

中ノ坪遺跡発掘調査報告書Ⅰ

—第1次・第3次発掘調査—

平成24(2012)年3月

吹田市教育委員会

序

中ノ坪遺跡は、昭和50年代後半、市民の方が工事現場において土器を発見したことがきっかけで知られるようになった遺跡です。当時は、古墳時代、奈良時代、鎌倉時代の土器片が出土したことから、遺物散布地として周知されました。その後、平成8年に実施した試掘調査で初めて中世以前の遺物とともに柱穴や溝などの遺構が確認され、中ノ坪遺跡に集落跡が展開する可能性が考えられるようになりました。そして、その後の発掘調査において古墳時代の集落跡が検出されるに至っております。さらに、中ノ坪遺跡は、縄文時代から中世にかけてという、当初確認されていた時期よりも広い時代幅をもつ遺跡であることが判明しつつあります。

このように、最初は市民による一つの発見が、徐々にではありますが、地域の歴史を知る上で貴重な知見となっております。今後、本市といたしましても、このような市民の方々による文化財の保護に対するご理解とご協力が得られますよう、より一層文化財の保護行政への取り組みに努めてまいりたいと考えております。市民の皆様におかれましても今後ともご協力いただけますようお願い申し上げます。

平成24(2012)年3月

吹田市教育委員会

教育長 西川 俊 孝

例 言

1. 本書は、吹田市内において実施した下記の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
吹田市岸部南3丁目757-1、-2、758-2、-3の一部、-4の一部 中ノ坪遺跡
(通算第1次調査)
吹田市岸部南3丁目183-1の一部 中ノ坪遺跡(通算第3次調査)
2. 現地における発掘調査は、吹田市立博物館文化財保護係田中充徳・堀口健二が担当した。
整理作業については、吹田市岸部北4丁目10番地1号、吹田市立博物館内資料整理室において実施し、資料の保管も同所において行っている。
3. 本報告書の執筆・編集作業は、田中と見解を取りまとめながら、堀口が行った。
4. 本文中の遺物番号は、挿図・写真図版とも統一した。遺物の縮尺は、土器・木製品・石製品は1/4、石器は1/2をそれぞれ基本とした。
5. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P.(東京湾標準潮位)を示す。
6. 発掘調査に当っては、事業者である西井コノ氏、岡本栄三郎氏、山本啓一氏をはじめ、多くの方々から多大な協力を得ました。記して感謝いたします。
7. 発掘調査および資料の整理には、以下の諸氏の参加を得た。
(発掘調査)
第1次：井出さやか、岡田明子、小田尚幸、佐藤健太郎、林田健一郎、丸岡亨、山根賢士
第3次：大城道則、佐藤健太郎
(整理作業)
第1次：花崎晶子、小川里美
第3次：花崎晶子、秋山芳恵、木松安紀子、桑原暢子

目次

第1章 位置と環境	1
第2章 中ノ坪遺跡第1次調査	5
第3章 中ノ坪遺跡第3次調査	27

挿 図 目 次

第1図 吹田市周辺の地形	1
第2図 吹田市周辺の主要遺跡分布図	2
第3図 中ノ坪遺跡発掘調査地周辺図	3
第6図 調査区配置図	5
第4図 西壁土層断面図	6
第5図 土層柱状図	7
第7図 第1面遺構平面図	8
第8図 S G 332 平面・断面図	9
第9図 S E 200 平面・断面図	10
第10図 遺構内遺物出土状況図	11
第11図 掘立柱建物平面・断面図(1)	12
第12図 掘立柱建物平面・断面図(2)	14
第13図 掘立柱建物・柵平面・断面図	15
第14図 遺構出土遺物実測図	16
第15図 木製品実測図	17
第16図 第2面遺構平面図	18
第17図 土坑平面・断面図	20
第18図 A区小ピット群拡大図	20
第19図 小ピット平面・断面図	22
第20図 遺物包含層出土遺物実測図	23
第21図 石器実測図	24
第22図 建物配置図	25
第23図 調査区配置図	27

第24図	土層断面図	28
第25図	遺構平面図	30
第26図	S D 1・S D 3断面図	31
第27図	S X 1平面・断面図	32
第28図	出土遺物実測図	33
第29図	石器実測図	34
第30図	嶋下郡南部条里と中ノ坪遺跡	35

図 版 目 次

図版1	第1次調査	第1面全景(1)
図版2	第1次調査	第1面全景(2)
図版3	第1次調査	第1面全景(3)
図版4	第1次調査	第1面全景(4)
図版5	第1次調査	第1面各遺構
図版6	第1次調査	第1面遺物出土状況
図版7	第1次調査	第2面全景
図版8	第1次調査	第2面各遺構
図版9	第1次調査	土層断面
図版10	第1次調査	発掘調査の記録
図版11	第1次調査	出土遺物(1)
図版12	第1次調査	出土遺物(2)
図版13	第3次調査	全景
図版14	第3次調査	各遺構・遺物出土状況
図版15	第3次調査	土層断面
図版16	第3次調査	発掘調査の記録・出土遺物

第1章 位置と環境

(1) 地理的環境(第1図)

吹田市は大阪府の北部に位置する。南は大阪市と接するが、その市境にはほぼ沿うような形で、安威川・神崎川が北東から南西に向けて流れている。吹田市域南側は、主に神崎川や淀川などの氾濫によって形成された沖積平野が広がり、一方の市域北部は千里丘陵が占めており、市域の北部と南部とは対象的な地形を形成している。

吹田市内において千里丘陵は、標高80m以下のなだらかな丘陵地となり、吹田市出口町付近がちょうど丘陵の南端部となる。平野部については、千里丘陵南端部付近を境として東側を安威川低地、西側を神崎川低地として区分される。またJR吹田駅付近から南側一帯には、縄文海進時に形成されたとされる吹田砂堆が広がり、平野部において微高地を形成している。

(2) 歴史的環境(第2図)

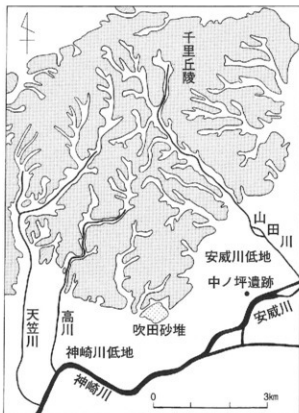
本書で報告する中ノ坪遺跡での発掘調査では、主に弥生時代から古墳時代にかけての集落跡と、平安時代以降の条里地割に関わる良好な成果を得ることができた。ここでは中ノ坪遺跡が所在する安威川低地側の弥生・古墳時代の集落遺跡と、古代以降の条里地割に関わる遺跡の動向を中心に紹介する。

弥生・古墳時代の集落遺跡はいくつか存在するが、明確な住居跡を検出した発掘調査例は限られる。七尾東遺跡第1次調査では、弥生時代中期後半の竪穴式住居が出土し、同一箇所でも5回にわたり建て替えが行われた様子が確認された[吹田市2002]。

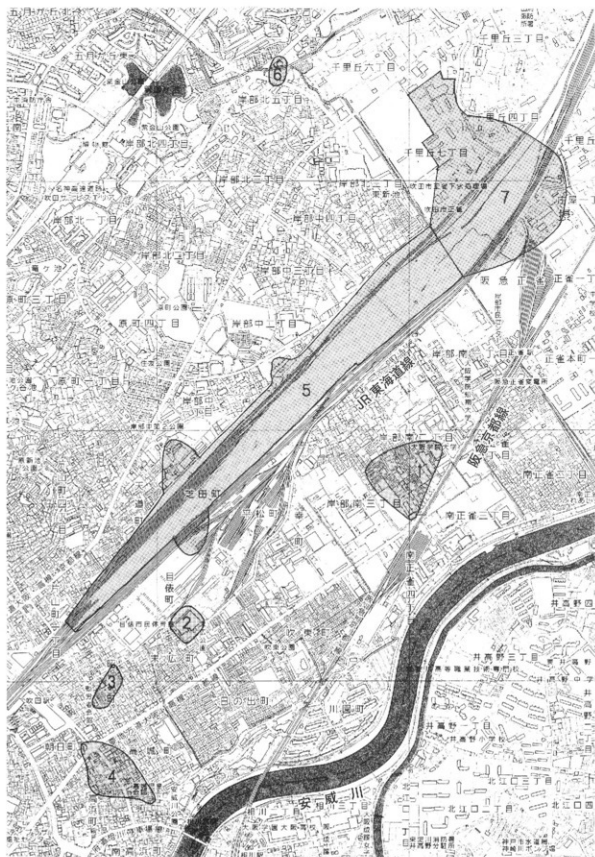
目依遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、湿地状の落ち込み地形に接してある舌状微高地上に、掘立柱建物8棟を検出した。また包含層からの出土であるが、土錘(棒状有孔土錘・管状土錘)などの漁具類が出土し、安定した微高地を居住区として、湿地のような場所で漁労を行っていた様子が確認された。[吹田市1999]。

高城B遺跡第2次調査では、微高地の縁辺部で、古墳時代中・後期の建物の可能性があるビット列を検出している。また2枚の建築部材と思われる板材が、井戸側に転用されていた状況が確認された[吹田市2001]。

また当市の東側に接する摂津市域の事例であるが、吹田操車場遺跡に隣接する明和池遺跡で



第1図 吹田市周辺の地形
(前田1990原図を基に作成)



- 1: 中ノ坪遺跡 2: 目依遺跡 3: 高畑遺跡 4: 高城B遺跡 5: 吹田操車場遺跡
 6: 七尾東遺跡 7: 明和池遺跡(参考)

第2図 周辺の主要遺跡分布図 (S=1/20,000)

は、弥生時代後期の竪穴式住居を検出している。これらの各住居跡には建て替えた痕跡が確認された。また河道内からは、同時期の土器溜まりが出土している[大文セ2010 a]。

さて周辺では平安時代以降、荘園経営に伴って耕地開発が盛んとなるが、吹田市東部から摂津市西部にかけては、真北から西方に33°振った嶋下郡南部条里と呼ばれる地割が認められる。吹田市域では、福留照尚氏の復元によると、東北端の1坪からはじまり東南端の36坪で終わる、「千鳥式坪並」が採用されていた。

大阪府文化財センターが実施した吹田操車場遺跡の発掘調査では、平安時代中期(10世紀末)の坪境の畦畔を検出している[大文セ2001]。また条里地割と同一方向に延びる、幅2m強間隔で平行に設けられた2列のピット列を検出している[大文セ2010 b]。

前述の日依遺跡では、平安時代末から室町時代にかけての条里地割にのる中世の坪境の可能性のある畦畔や耕作地区画を検出している。但しここでは、地形的影響により条里地割からずれる方位も認められた[吹田市1999]。

その他、高城B遺跡第1次調査、本市が実施した吹田操車場遺跡第2次調査、高畑遺跡第2次調査などでも、条里地割ののりつつあった鋤溝と思われる耕作溝列を検出している。特に高畑遺跡では、平安時代中期の掘立柱建物(2間×2間の総柱建物)を検出しているが、棟方向も条里地割ののり、同一方向に向かって建てられていたことが確認された[吹田市2000]。

(3) 中ノ坪遺跡の既往調査(第3図)

中ノ坪遺跡は、1980年代前半に大阪学院大学校内より古墳・奈良時代の須恵器、土師器、鎌倉時代の瓦器などの土器類が採集されたことから、古墳時代から鎌倉時代にわたる遺物散布地として知られるようになった。

中ノ坪遺跡の考古学的な調査は、今回報告する第1次調査と第3次調査のほか、第1次調査地の南側隣接地で、平成10(1998)年に第2次調査を実施している。これは計22箇所の小規模な調査区を設けるグリッド調査で、2時期にわたる遺構面を確認した。遺構上位面では、中世以前の土坑・ピット等を11基検出し、弥生土器壺、古墳時代の土師器、瓦器等が出土した。下位面では、遺物の出土が一切なく時期は不明であるが、南側に展開する池か湿地状の落ち込み地形が検出されている。



第3図 中ノ坪遺跡発掘調査地周辺図
数字は調査回数 (S=1/4,000)

【参考文献】

- 吹田市教育委員会 1999『日俣遺跡』
- (財)大阪府文化財センター 2001『吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』
- (財)大阪府文化財センター 2010 a 『明和池遺跡・現地公開資料』
- (財)大阪府文化財センター 2010 b 『吹田操車場遺跡』Ⅲ
- 吹田市都市整備部・吹田市教育委員会 1999『高城B遺跡』
- 吹田市教育委員会 2000『高畑遺跡』[平成11年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報]
- 吹田市教育委員会 2001『高城B遺跡第2次発掘調査報告書』
- 吹田市教育委員会 2002『七尾東遺跡発掘調査報告書—第1次・第2次・第3次—』
- (独)鉄道建設運輸施設整備支援機構、吹田市教育委員会 2008『吹田操車場遺跡確認調査報告書』
- 吹田市教育委員会 2010『吹田操車場遺跡第3次・第4次調査』[吹田市埋蔵文化財発掘調査報告書]1
- (独)鉄道建設・運輸施設整備支援機構、摂津市教育委員会 『明和池遺跡確認調査報告書』
- 福留照尚 1989『吹田地方の条里制』[吹田市史]第1巻 吹田市史編さん委員会

第2章 中ノ坪遺跡第1次調査

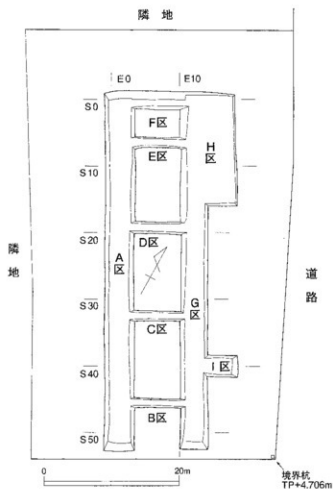
1. 調査の経過(第4図)

今回の発掘調査は、共同住宅の建設工事に伴い実施したものである。当該工事予定地は中ノ坪遺跡の包蔵地に位置したことから、まず平成9(1997)年5月21日と6月2・3日に当該地内で確認調査を行った。その結果、複数の遺構面上にピット、柱穴、溝、土坑などを検出するとともに、主に弥生土器や土師器などの弥生時代から古墳時代にかけての遺物の包含を確認した。

これにより予定される建設工事が着工された場合、遺構・遺物が破壊されると判断されたため、事業者と協議を行い、予定の建築物で遺構・遺物の破壊が考えられる部分について拡大調査を実施したものである。

発掘調査は、平成9(1997)年6月16日～7月31日の間に実施した。調査区の設定については、予定建築物の基礎構造に合わせて、東西方向に最大長18m×幅1.2m、南北方向に最大長52m×幅2.8m(北東隅のみ幅7.2m)の調査区を「日」字状に設定した。調査面積は446.7㎡である。調査に際しては、工事用基準点に準じて東西11.5m×南北6.5mの地区割りを設定し、遺物の取り上げ等を行ったが、本報告では計測しやすく、10m間隔で東へE10、南へS10・20…と表記した。

調査区の設定後は、現代盛土層・攪乱層については重機を使用して掘削を行い、それより下層は人力により注意深く掘削した。そして各遺物包含層を掘削するごとに、層面上において遺構の検出作業を行い、検出遺構および遺物の出土状況について写真撮影および遺構平面図・土層断面図作製などの記録作業を行った。



第4図 調査区配置図

2. 調査の成果

(1) 基本層序(第5・6図、図版9)

調査地点地表面の標高は約4.7mである。調査区内の基本的な層序をまとめて以下に記す。土色注記は、一部を『新版土色帖』に準じて整理しなおした。粒径区分はアメリカ法による。

当調査地の堆積構造を巨視的に見ると、ほぼ同じ土質が南北方向に広がりを見せる、比較的単純な水平堆積層である。但し第Ⅶ層は、南端部で徐々に傾斜して低くなる状況が見られた。また第Ⅳ層以上の各層は、S42付近で南側へ段状に低くなる状況が見られた。これらは、耕作地化に伴う人為的改変と密接に関係するものと思われる。

なお井戸SE200の断ち割りに伴う断面観察によると、第Ⅷ層は、粘上～シルト～粗粒砂～細礫が漸移的に堆積する級化層理の水成層である。第Ⅹ層は、千里丘陵起源の砂礫を供給源として形成された当地の基盤層となる。

第Ⅰ層：現代の盛土層。層厚約30～80cmを測る。下層に影響されて、南側で厚くなる。

第Ⅱ層：暗青灰色中粒砂シルト層。旧耕土である。層厚約20～30cmを測る。南側で階段状に低くなる。

第Ⅲ層：にぶい黄色～オリーブ灰色粗粒砂層。層厚約20cmを測る。北半部のみで見られる。

第Ⅳ層：青灰色粘土層。層厚約20cmを測る。北半部のみで見られる。

第Ⅴ層：青灰色シルト質粘土層。層厚約20cmを測る。第1面(新段階)ベース層を形成する。

第Ⅵ層：黒褐色粘質シルト層(酸化糸根状鉄斑が入る)。層厚10cm以下で、南半部では途切れる箇所もある。主に弥生～古墳時代の遺物をやや多く包含する。

第Ⅶ層：褐色粘質シルト層。層厚約40cmを測る。第1面(古段階)ベース層を形成する。

第Ⅶ-a層：明青灰色粘土層。層厚約10cmを測る。第2面ベース層を形成する。

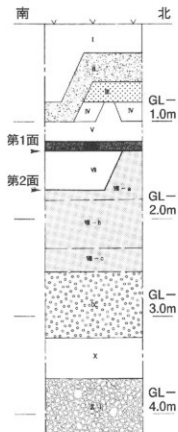
第Ⅶ-b層：シルト質粘土層。層厚約50cmを測る。

第Ⅶ-c層：粗粒砂層。層厚約24cmを測る。

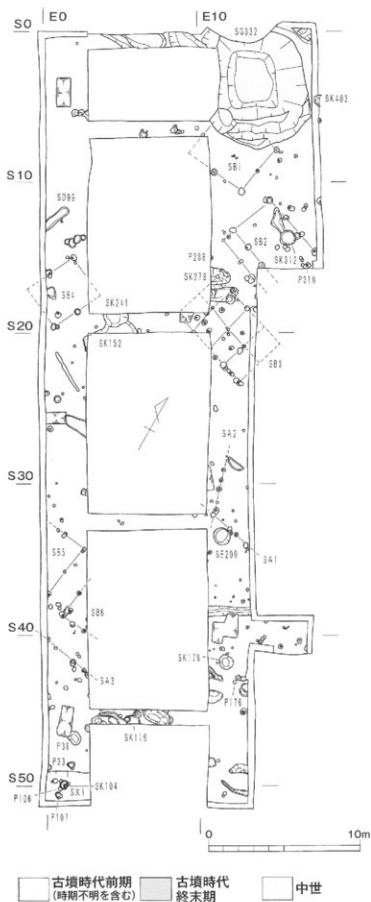
第Ⅶ-d層：明青灰色シルト質砂礫層。層厚約66cmを測る。

第Ⅷ層：明青灰色シルト層。層厚約42cmを測る。

第Ⅹ層：赤褐色砂礫層。層厚56cm以上を測る。千里丘陵起源の砂礫による堆積層と考えられる。



第6図 土層柱状図
(S=1/40)



第7図 第1面遺構平面図

(2) 検出遺構と遺構出土遺物

今次の発掘調査では、2面の遺構面を検出した。但し第1面の一部の遺構については、断面観察や埋土の対比から、本来1層上位にあたる第V層上面で形成されたものであることが後に判明した。そのためここでは、同じく第VI層上面で検出したものの、本来第V層上面に伴うものを第1面新段階とし、第VI層に伴うものを第1面古段階と分けて報告する。以下に、順を追って各遺構面と主な遺構・遺物を記す。

なお遺構には一連の番号を付け、その前にSA：欄列、SB：建物、SD：溝、SE：井戸、SG：池、SK：土坑、P：ピット、SX：不明・その他などの分類記号を付した。

①第1面(第7図、図版1～4)

A 新段階(中世)

池状の大型土坑1基、素掘り井戸1基を検出した。

池SG332(第8図、図版1)

H区の北端で検出した。東西7.1m以上×南北8.16m以上、深さは検出面から2.01mを測り、調査区東・北・西側へと展開する。未掘部分も多いが、おおむね平面形は円形である。埋土は大きく2層に分かれ、下半部は細かなレンズ状堆積により、上半部はほぼ単層である。このことから周囲からの土砂の流れ込みなどにより徐々に堆積した後、ある時

期に一気に埋没したものと思われる。埋土中より須恵器甕1点、古代の土師器片、小皿と思われる土師器小片、獣骨などが少量出土した。

図化した遺物を見ると、23は須恵器甕である。口縁部1/11の破片からの反転復元で、口径21.0cm、残存高4.7cmを測る。口縁部の形状は、東海地方の陶器甕に見られるいわゆる「N」字状口縁を呈する。概ね鎌倉時代(13世紀代)の所産である。

井戸 S E 200(第9図、図版4)

G区の中央部で検出した。東西99cm×南北1.11m、深さは検出面から2.57mだが、本来の第V層上面からの深さは約2.8mと推定される。井戸側に関する遺構等の痕跡は認められなかったが、底部がかつての水脈層と思われる砂礫層にまで達していることから、素掘り井戸と思われる。

埋土はほぼ単層に近く、短期間のうちに埋没したと思われる。埋土中からは、遺物は出土しなかった。

B 古段階(古墳時代)

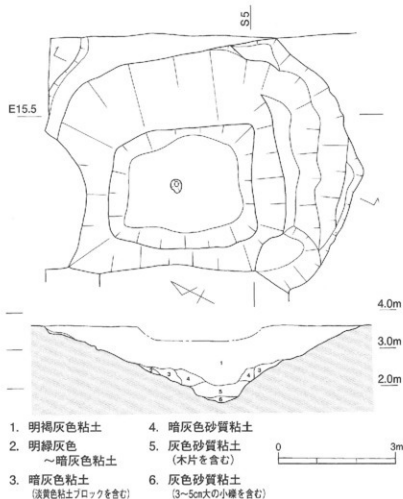
遺構面は、標高約3.6m付近に位置する。掘立柱建物6棟、欄列3条、土坑、柱穴、ピット、溝、落ち込みなどを検出した。

土坑・ピット・溝

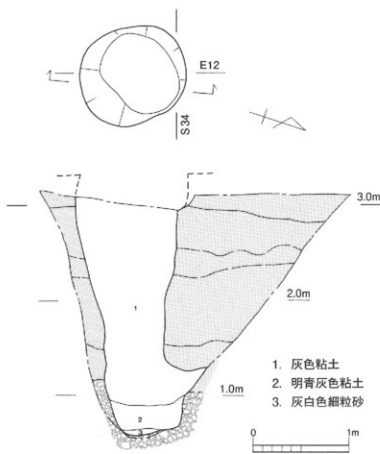
土坑 S K 178(図版6)

H区で検出した。平面形は円形で、東西91cm×南北1.05m、深さ52cmを測る。埋土中より、弥生土器壺(2・3)などが出土した。

2は長頸壺の体部である。頸部1/5からの反転復元で、残存高2.5cmを測る。肩部に2条の線刻を描く。3は広口壺の口縁部で、図化部は完存する。口縁部に2条の沈線を巡らした上に、



第8図 S G 332平面・断面図



第9図 SE200平面・断面図

た。第10図は、埋土上層での出土状態を図化したものであるが、遺物整理段階で図化できたものは、土師器鉢(9)・壺(16)の2点のみであった。その他の図化可能な遺物は、すべて埋土下層からの出土であった。なおそれらの遺物は、出土状態に特にまとまりはなく、散在的な出土であった。

9は口縁部1/3の破片からの反転復元で、口径11.2cm、器高6.8cmを測る。古墳時代初頭(3世紀代)の所産である。10は完形で手捏ね成形により、口径6.2cm、底径3.4cm、器高4.0cmを測る。畿内第V様式に相当し、弥生時代後期の所産である。

11・12は共に山陰系の土師器である。11は台付き鉢の台部である。底部1/5の破片からの反転復元で底径5.0cm、残存高2.4cmを測る。12は鼓形器台である。頸部は完存し、頸径6.6cm、残高5.5cmを測る。裾部の破片も出土しているが、接合はできなかった。

13～15は布留式甕である。13は口縁部1/5の破片からの反転復元で、口径11.6cm、胴径13.6cm、残高8.0cmを測る。口縁端部が若干内側に屈曲気味となる。14は口縁部1/6の破片からの反転復元で、口径14.7cm、残高7.4cmを測る。口縁端部が若干肥厚気味となる。15は口縁部1/6の破片からの反転復元で、口径14.0cm、残高10.4cmを測る。口縁端部の内部肥厚が内傾し面を持つ。13～15とも、内面の削りは頸部の屈曲部にまで及ばない。

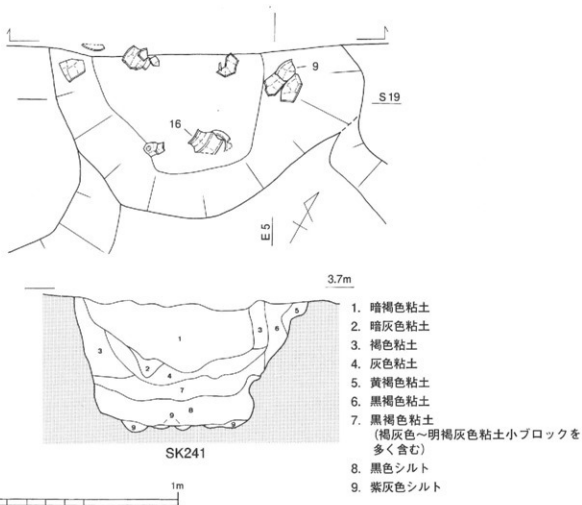
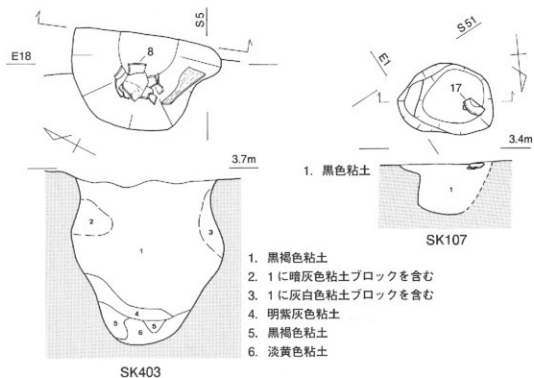
16は口縁部1/7の破片からの反転復元で、口径32.4cm、残存高7.5cmを測る。大型の土師器

円形浮紋を計12個貼り付ける。ともに畿内第V様式に相当し、弥生時代後期の所産である。

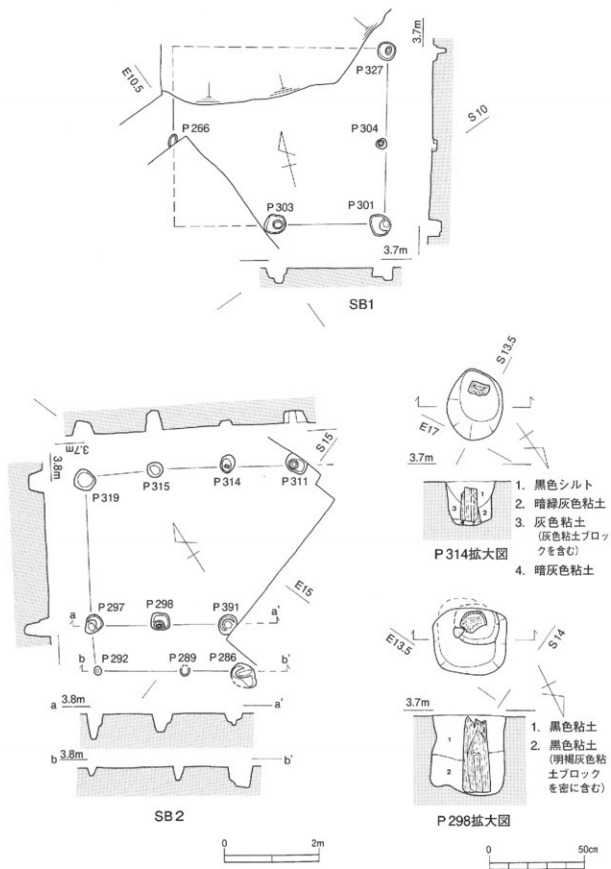
土坑SK241(第10図、図版6)

D区で検出した。検出途中までは1条の溝状遺構と認識していたが、掘り進めていくうちに円形土坑(SK241)と方形大型土坑(SK152)が重複関係にあることを確認した。ただし埋土は両土坑とも酷似しており、両者の先後関係は判断できなかった。平面形は検出部分では半円形を呈し、東西1.62m×南北90cm以上、深さ67cmを測り、調査区北側へと展開する。

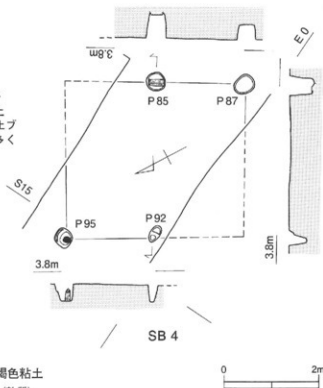
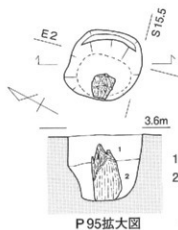
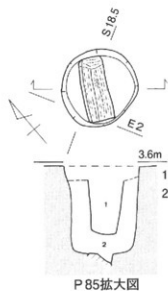
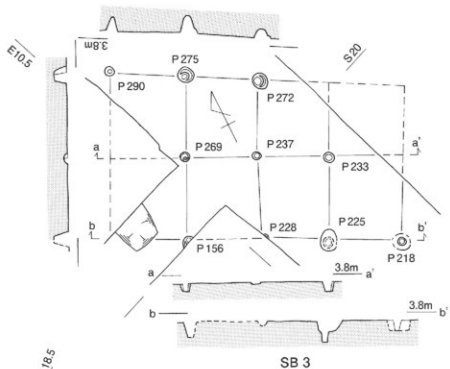
埋土中から弥生土器ミニチュア鉢(10)、高坏、土師器甕(13・14・15)、器台(12)、鉢(9)、台付き鉢(11)、壺(16)などが出土し



第10図 遺構内遺物出土状況図 (遺物番号は実測図番号と対応)



第11図 掘立柱建物平面・断面図(1)



第12図 掘立柱建物平面・断面図(2)

二重口縁壺と考えられるが、残存状態が悪く、整理段階で出土時の姿に接合する事が出来なかった。以上は、古墳時代前期(4世紀代)の所産である。

土坑S K403(第10図、図版6)

H区の東壁付近で検出した。平面形は半円形で、東西51cm以上×南北78cm、深さ93cmを測り、調査区東側へと展開する。小さな土坑であるが、埋土中から弥生土器甕(4)、土師器鉢(5)、壺(6)、甕(7・8)、高坏、板状加工木材などが折り重なるように出土した。

4は底部が完存し、底径4.4cm、残存高2.5cmを測る。畿内第V様式に相当し、弥生時代後期の所産である。5は口縁部1/8の破片からの反転復元で、口径12.4cm、残存高5.0cmを測る。古墳時代初頭～前期(3～4世紀代)の所産である。6は小型壺である。全体の約7割が残存し、口径7.0cm、胴径10.2cm、器高9.1cmを測る。内・外面共に丁寧なナデ調整を施す。吉備系土器と思われる。

7・8は共に布留式甕である。7は口縁部1/5の破片からの反転復元で、口径16.6cm、残存高5.2cmを測る。口縁端部の内部肥厚が内傾し面を持つ。8は口縁部1/2の破片からの反転復元である。底部片も出土しているが、破片の接点が少ないために接合していない。口径16.6cm、胴径22.7cm、残存高21.2cmを測る。口縁端部は玉縁状に肥厚し、内面の削りは頸部の屈曲部にまで至らない。以上は、古墳時代前期(4世紀代)の所産である。

土坑S K312

H区で検出した。平面形は円形を呈し、東西92cm×南北1.02m深さ62cmを測る。埋土中より土師器壺(22)などが出土した。

22は全体の約6割が残存し、体部下が欠損しているが下部近くで肉厚になることから、小さな底部があったと思われる。口径12.6～12.8cm、胴径23.0cm、残存高22.6cmを測る。古墳時代初頭頃の吉備系土器であろうか。

土坑S K278

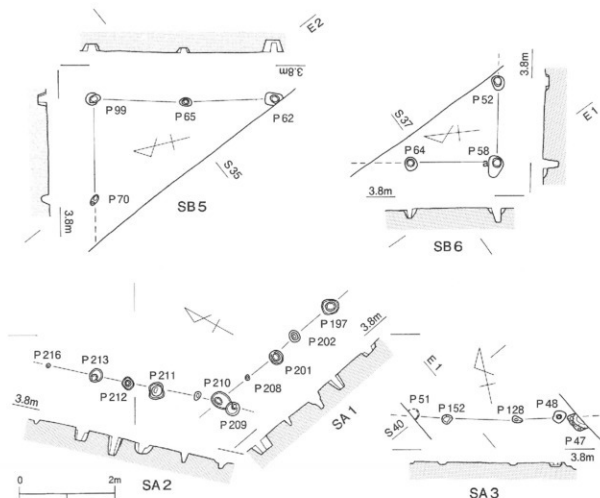
G区の西壁付近で検出した。平面形は不定形で、東西1.28m以上×南北37cm、底部は凹凸が著しいが、最深部で深さ34.6cmを測る。

埋土中より有舌尖頭器(34)が出土した。先端部と舌の部分が欠損し、残存長5.5cm、最大幅1.9cm、基部幅1.2cm、厚さ0.6cmを測る。縄文時代草創期の所産である。なお同遺構埋土からは、土器類は出土しなかった。

ビットP107(第10図)

A区の南端で検出した。平面形は円形で、東西49cm×南北37cm、深さ26cmを測る。埋土中より須恵器坏蓋(17)など2個体分の須恵器、砥石(18)などが出土した。なおこの坏蓋17は、第6層(黒褐色粘質シルト層)中より出土の破片との接合ができた。

17は全体の約9割が残存し、口径12.7cm、器高4.5cmを測る。高蔵209～高蔵217型式古相に相当し、古墳時代終末期(7世紀前半)の所産である。18は2面に研磨面が残り、全長12.3cm、全幅9.3cm、厚さ2.3cmを測る。



第13図 掘立柱建物・櫓 平面・断面図

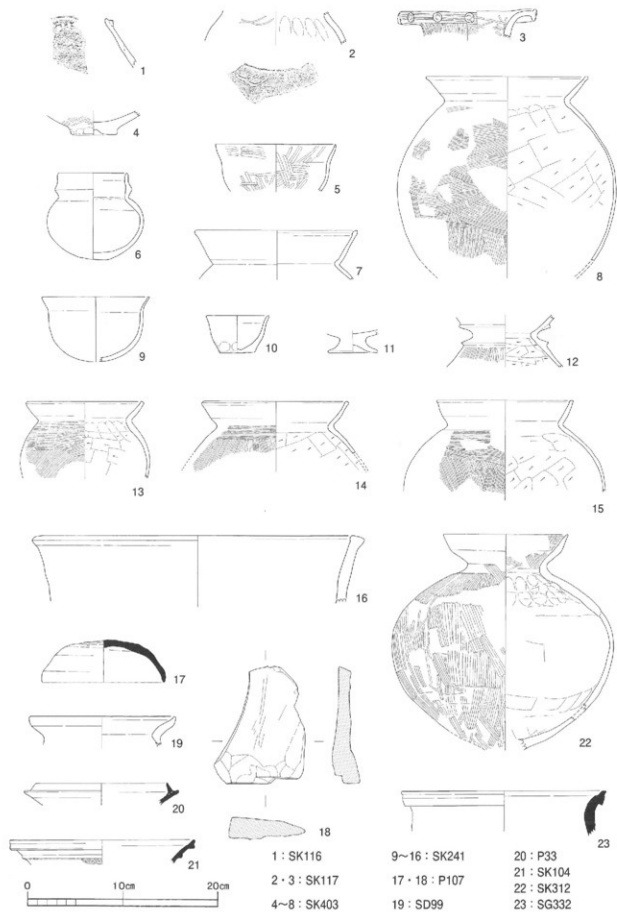
ビットP176(写真図版6)

G区で検出した。平面形は円形の小さなビットで、東西23cm×南北29cm、深さ10cmを測る。埋土中より、土師器小型丸底壺が横倒しの状態で全体の約半分が出土した。写真撮影はできたものの、台風による増水で破片の一部が流出してしまったため、出土時の姿に復元する事ができなかった。

その他のビット・土坑

A区のP33埋土中から須恵器坏身(20)、P104埋土中から須恵器甕(21)、B区のSK116埋土中から縄文土器深鉢(1)などが出土した。

Iは小片のため口径不明で、残存高6.0cmを測る。口縁端部より若干下方に刻み目突帯紋を施す。縄文時代晩期末葉(船橋式期)の所産である。20は口縁部1/10の破片からの反転復元で、口径13.8cm、残存高2.3cmを測る。高蔵209～高蔵217型式古相に相当し、古墳時代後期～終末期(6世紀末～7世紀前半)の所産である。21は口縁部1/13の破片からの反転復元で、口径19.2cm、残存高2.5cmを測る。口縁部に5条1組の櫛描き波状紋を施す。大野池46～高蔵208型式に相当し、古墳時代中期(5世紀中頃)の所産である。



1: SK116

9~16: SK241

20: P33

2·3: SK117

17·18: P107

21: SK104

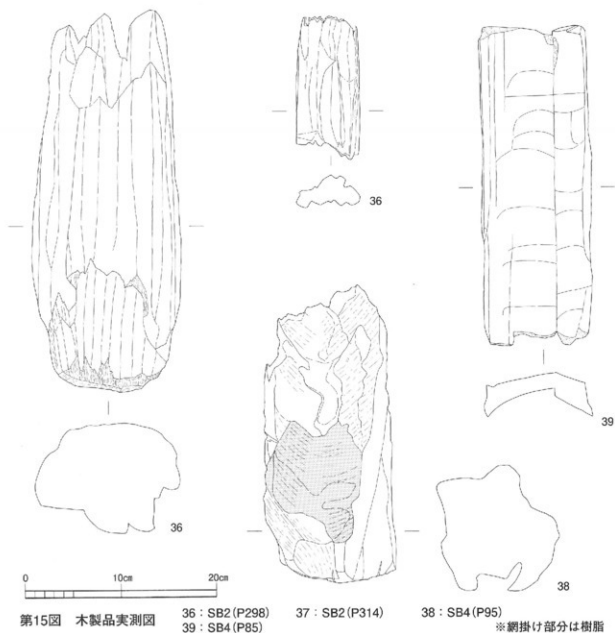
4~8: SK403

19: SD99

22: SK312

23: SG332

第14图 遺構出土遺物実測図



溝SD99

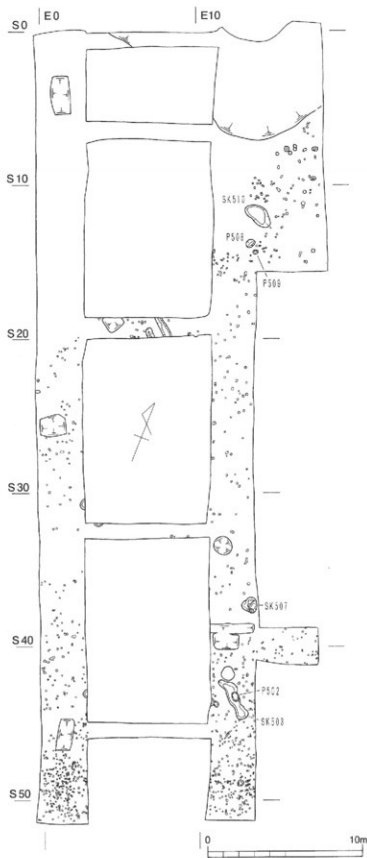
A区で検出した。全長2.1m以上×幅50～60cm、深さ9cmを測る。主軸方位はN23°Eである。埋上中から、土師器甕(19)が出土した。口径1/5の破片からの反転復元で、口径15.2cm、残存高3.2cmを測る。全体的に磨滅が著しく、調整技法は不明である。

掘立柱建物・柵列

建物遺構は、すべて発掘調査終了後の整理作業段階において、図面上で検討した復元案である。

建物SB1 (第11図、図版5)

H区で検出した。北側の一部はSG332と重複して不明であるが、梁行2間(3.72m)×桁行2間(4.44m)、面積16.5㎡を測る、東西棟の側柱建物で、平地式建物と考えられる。主軸方位



第16図 第2遺構平面図

はN80°Wである。

P301・P327の埋土中から土師器の小片、P303埋土中から土師器、須恵器の小片が出土したが、いずれも図化困難な小片であった。

建物SB2 (第11図、図版5)

H区で検出した。梁行2間(4.1m)×桁行3間(4.4m)、面積18.0㎡を測る、母屋の南面に廂が付く、東西棟の側柱建物で、平地式建物と考えられる。さらに調査区東側に展開する可能性もある。ただし廂とした柱穴列の間隔が母屋とずれていることから、建物に付属する欄列の可能性もある。主軸方位はN68°Wである。母屋部分の柱に相当するP298とP314には、柱根が残存していた。

柱根P298 (第11・15図、図版5)

掘り方の平面形は方形に近く、東西35cm×南北38cm、深さ42cmを測る。柱根は径15.0cm、残存長40.0cmを測る。埋土から、土師器の小片が出土した。

柱根P314 (第11・15図、図版5)

掘り方の平面形は楕円形を呈し、東西38cm×南北28cm、深さ38cmを測る。柱根は径6.6cm、残存長15.0cmを測る。埋土から遺物は出土しなかった。

その他、P286・P297・P315・P319の各埋土中から、土師器の小片が出土した。

建物SB3 (第12図)

G区で検出した。梁行2間(3.4m)×桁行4間(6.4m)、面積20.4㎡を測る。

る、東西棟の総柱建物で、高床式建物と考えられる。さらに調査区東側、または西側に展開する可能性もある。主軸方位はN66°Wである。

P156・P218・P225の各埋土中から、土師器の小片が出土した。

建物S B 4 (第12図、図版5)

A区で検出した。梁行1間(3.28m)×桁行2間(3.78m)、面積12.3㎡測る。南北棟の側柱建物で、平地式建物と考えられる。主軸方位はN26°Eである。P85・87・95の各埋土中から、土師器の小片が出土した。またP85の底部には礎板が残存し、P95には柱根が残存していた。

柱根P95(第12・15図、図版5)

掘り方の平面形は円形を呈し、東西37cm×南北30cm、深さ14cm以上を測る。柱根は径14.1cm、残存長31.2cmを測る。底部には加工痕が残り、表面の一部には樹皮が残存し(図中着色部分)、白太部分を残していた。

柱穴P85(第12・15図、図版5)

掘り方の平面形は円形を呈し、東西43cm×南北39cm、深さ46cmを測る。セクション断面より柱痕が観察できたほか、柱穴底部に礎板が据えられていた。

礎板は、全長33.5cm×全幅11.1cm、厚さ4.6cmを測り、断面形は「へ」字形を呈する。表面に手斧痕が残る。なおこの礎板は、「へ」字形の鈍角部を上側に据えた状態で出土したが、基礎固めとしては水平に据えるのが一般的である。礎板として専用に加工されたものではなく、何らかの転用材と思われる。

建物S B 5 (第13図)

A区で検出した。1間(2.1m)×1間(3.78m)、面積7.9㎡以上を測り、さらに西方へ展開する。側柱建物で、平地式建物と考えられる。南北方向の方位は、N9°Eである。P99埋土中から弥生土器、土師器の小片などが出土した。

建物S B 6 (第13図、図版5)

A区で検出した。1間(1.73m)×1間(1.72m)、面積3.0㎡以上を測り、さらに東方へ展開する。一部分のみの検出のため、棟方位や平面構造は不明である。南北方向の方位は、N8°Eである。各ピット埋土中からは、遺物は出土しなかった。

櫓列S A 1 (第15図)

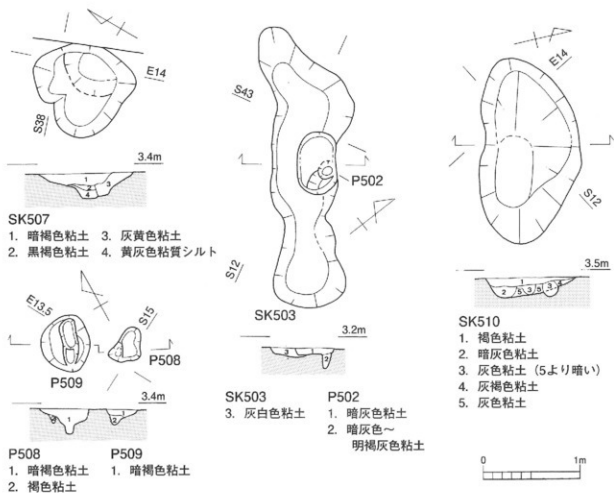
G区で検出した。東西方向に延び、4間(3.08m)以上を測り、さらに調査区東側と西側に展開するものと思われる。主軸方位はN87°Wである。いずれのピット埋土中からも、遺物は出土しなかった。

櫓列S A 2 (第15図)

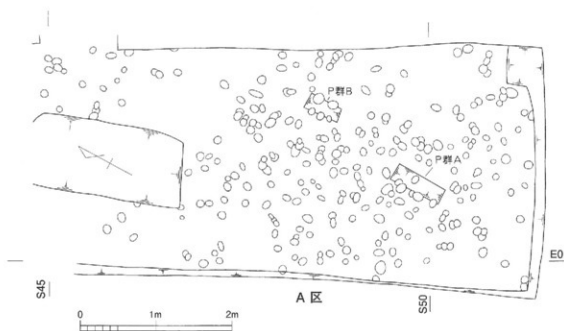
G区で検出した。南北方向に延び、5間(3.98m)以上を測る。主軸方位はN16°Wである。いずれのピット埋土中からも、遺物は出土しなかった。

櫓列S A 3 (第15図、図版5)

A区で検出した。南北方向に延び、3間(2.98m)以上を測り、調査区東側と西側に展開する。



第17図 土坑平面・断面図



第18図 A区小ピット群拡大図

主軸方位はN80°Eである。いずれのピット埋土中からも、遺物は出土しなかった。

落ち込みS X 1

A区で検出した。南側に緩く下る落ち込み状地形で、検出面の最深部で11.7cmの高低差を測る。なおG区南端部では、落ち込み方の続きが検出されていないことから、直線的に東へ広がるのではなく、南側に向けて緩くカーブするものと思われる。

②第2面(第16図)

土坑、溝、ピット、小ピット群を検出した。すべての遺構において、遺物は出土しなかった。

土坑・ピット

土坑S K 507(第17図)

G区で検出した。平面形が「♥」形を呈し、東西98cm以上×南北1.07m、深さ26cmを測る。

ピットP 508(第17図、図版8)

H区で検出した。平面形が隅丸三角形を呈し、東西40cm×34cm、深さ16cmを測る。

ピットP 502・土坑S K 503(第17図、図版8)

A区で検出した。ピットと土坑が重複して検出され、土坑が古く、ピットが新しい先後関係にある。土坑は全長2.97m×幅79cm、深さ10cmを測る浅い溝状を呈する。ピットは平面形が楕円形を呈し、東西39cm×65cm、深さは平均的な箇所では9cm、最深部で22cmを測る。

土坑S K 510(第17図)

H区で検出した。平面楕円形を呈し、東西1.94m×1.06m、深さ18cmを測る。

小ピット群(第18・19図、図版8)

調査区のほぼ全域で検出されたが、特に南端部で密集し、その他ではやや希薄であった。また北西隅付近では検出されなかった。

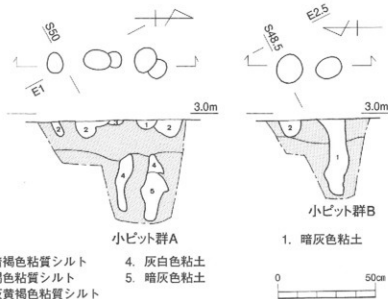
おおむね平面形が円形またはやや楕円形で、長径12～15cm前後が多く、深さは断ち割りを行ったもののうち、最も浅いもので2cm、深いもので40cmを測る。

検出した土坑は、いずれも平面形・断面形も不定形であった。また小ピット群についても、断ち割り後の断面観察により、杭痕のように直線的ではなく、不定形で曲線的なものも多く見られ、また底部も不明瞭なものが多かった。

以上のような状況から、土坑は風倒木痕などの可能性が考えられる。小ピット群についても、杭痕や柱穴のような人工的な穴ではなく、植物の根痕などの可能性が高いように思われる。

(3) 遺物包含層出土遺物(第20図)

遺構埋土出土分と遺物包含層中から、コンテナ4箱分の遺物の出土があった。その内訳は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器・石器・石製品など多種にわたった。以下では遺物包含層中出土分のうち、特徴的な遺物や、下限年代を示す遺物を中心に報告する。



第19図 小ピット 平面・断面図

磁器染付椀(25)が出土した。底部1/5からの反転復元で、高台径5.0cm、残存高2.8cmを測る。全面に施釉し、具須で線を描く。高台登付は露胎で、高台外面に離れ砂痕が残る。江戸時代(18～19世紀代)の所産である。

第IV層(青灰色粘土層)

須恵器鉢(26)が出土した。小片のため口径は不明で、残存高5.6cmを測る。西長尾5号窯式に相当し、平安時代(10世紀後半～11世紀前半)の所産である。

第V層(青灰色シルト質粘土層)

弥生時代か古墳時代かの用途不明土製品(27)が出土した。残存高2.3cm、最大径7.0cmを測り、全面が浅黄色2.5Y 7/4を呈する。上面はなで調整、下面は指押さえによる。

第VI層(黒褐色粘質シルト層)

須恵器鉢(28)、須恵器坏蓋(29・31)、須恵器甕(30)、石鉢(35)などが出土した。

28は須恵器鉢である。口縁部1/12からの反転復元で、口径13.8cm、残存高4.0cmを測る。古墳時代後期の所産であろうか。29・31は須恵器坏蓋である。29は口縁部1/9からの反転復元で、口径15.2cm、残存高3.5cmを測る。高蔵43型式に相当し、古墳時代後期(6世紀後半)の所産である。31は口縁部1/11からの反転復元で、口径13.2cm、残存高1.1cmを測る。陶器山21型式に相当し、奈良時代(8世紀後半)の所産である。30は須恵器甕である。口縁部1/6からの反転復元で、口径21.6cm、残存高4.3cmを測る。高蔵217～高蔵46型式に相当し、古墳時代終末期(7世紀中頃)の所産である。35はサヌカイト製の凹基無茎鉢である。先端部が僅かに欠損し、残存長2.5cm、基部幅1.8cm、厚さ0.3cmを測る。縄文時代の所産である。

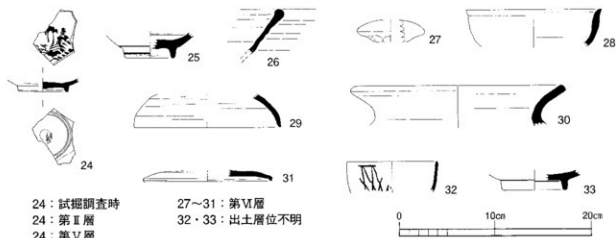
出土層位不明

磁器染付椀(32・33)などが出土した。出土層位は不明であるが、取り上げ日時から考えて、

試掘調査時

京焼系陶器皿(24)などが出土した。24は底部1/3からの反転復元で、高台径5.2cm、残存高2.1cmを測る。全面に施釉し、高台から底面にかけては露胎となる。見込みに具須で樹木を描き、高台内に「清水」の線刻による裏銘を刻む。江戸時代(18～19世紀代)の所産である。

第II層(暗青灰色中粒砂質シルト層)



第20図 遺物包含層出土遺物実測図

おおむね第Ⅱ層周辺からの出土とみられる。

32は体部からの反転復元で、口径9.3cm、残存高3.3cmを測る。全面に施釉し、外面に呉須で二重網目紋を描く。33は底部1/8からの反転復元で、高台径6.6cm、残存高2.1cmを測る。全面に施釉して、呉須で線を描き、高台登付は露胎である。以上は、江戸時代(18～19世紀代)の所産である。

【参考文献】

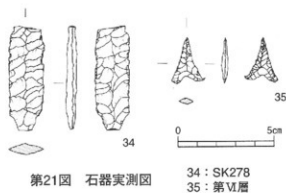
- 石井清司 1983「篠宮跡出土の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第7号 (財)京都府埋蔵文化財調査 研究センター
- 大川清・鈴木公雄・工業普通編 1996『日本土器事典』雄山閣
- (財)大阪府文化財センター編 2006『古式土師器の年代学』
- 小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年の研究』京都編集工房
- 坂幸恭 1993『地質調査と地質図』朝倉書店
- 鈴木道之助 1991『図録 石器入門事典』縄文編 柏書房
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 寺沢薫・森岡秀人編 1990『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社
- 奈良県立橿原考古学研究所編 2003『奈良県の弥生土器集成』資料編
- 原田昌則 1993「久宝寺遺跡第1次調査(K II84-1)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会

3. まとめ

(1) 遺構の変遷

① 時期不明遺構

土坑は平面・断面形とも不定形で、土器類が一切出土していないことから、人工的なものと



第21図 石器実測図

34 : SK278
35 : 第Ⅵ層

言うよりは風倒木痕のような、自然現象によって生じた微地形の可能性もある。調査区南端部に密集し、北半部では希薄な傾向が見られ、特に北西部は空白地帯となっている。当地は元々微高地上で、調査区北側は南側に比べて検出面の標高が10cmほど低くなっている。これは後世の耕作地化に際して、高い箇所が平らに削平されたため、結果的に小ピットが残らず、削平

をあまり受けなかった南側に多く残されたためとも考えられる。

したがって当地は、草木が繁茂する原野のような環境であったと推測される。これらの遺構については無遺物のため明確ではないが、少なくとも古墳時代前期よりも古いことは確実と思われる。

②古墳時代遺構(第22図)

第1面・古段階では、多数のピット・土坑・溝などを検出し、古墳時代前期(4世紀代)と古墳時代終末期(7世紀前半)を中心とする遺物が出土した。

建物遺構では、掘立柱建物6棟、柵列3条の復元が可能であった。その他にも柱根・柱痕の残るピットや、柱の抜き取り痕と考えられるピットが多数あり、本来はもっと多くの建物が存在していたと推察される。掘立柱建物はいずれも小型である。SB3は、総柱建物の高床式建物(倉庫か)が想定され、それ以外は、側柱建物の平地式建物が想定される。またSB2は、母屋片面の南側に廂を持つ。

各柱穴から出土した土器の年代から、SB2・SB3・SA1はおおむね古墳時代前期と考えられる。SB1を構成する柱穴からは、時期不明ながら須恵器の小片が1点出土しており、古墳時代中期以降の所産と考えられ、建物群の中では最も新しい。

これを遺構の重複関係から見ると、柵列はSA2が古くてSA1が新しい先後関係にある。また主軸方位から見ると、SB2・SB3の一群と、SB5・SB6・SA2・SA3の一群にまとまりがあるように思える。特にSB2とSB3は、主軸方位だけでなく柱間もおおむね等間隔であり、両建物に規格性が看取できる。

一方落ち込みSX1は、東南方向へ緩くカーブしながら南側に向いて傾斜しているものと思われる。これは同遺跡第2次調査で検出された、池か湿地状と見られる落ち込み遺構に対応するものと見られる。

以上の点から総合的に判断すると、当調査地においては池または湿地に接しつつ微高地として地盤の安定した土地を利用して、古墳時代前期を中心にしてつつも古墳時代全般を通じて集落が営まれていたと考えられる。

なお二次堆積遺物ではあるが、縄文時代晩期末葉の縄文土器(船橋式土器)、石器類、弥生時代後期の弥生土器(畿内第V様式)なども出土した。当遺跡の既往調査では、これまで縄文時代

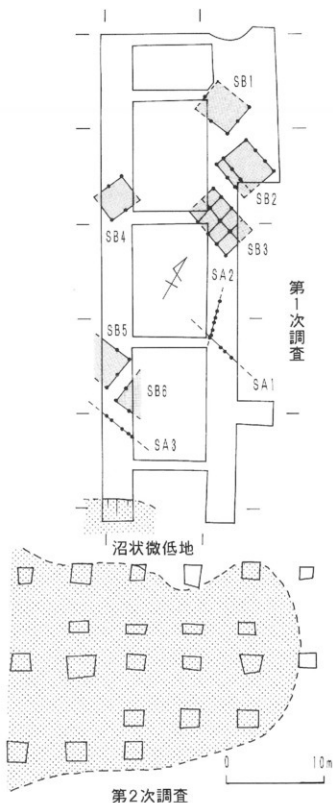
の遺構は確認されておらず、また吹田市内全域を見渡しても、縄文時代の遺構を検出する遺跡自体が少ない傾向にある。当調査地より北北西方約1.9km地点に位置する七尾瓦窯工房跡下層遺構の自然流路と見られる落ち込みや[吹田市1985]、七尾東遺跡からも縄文時代晩期の土器が出土し[吹田市2002]、また南西約1km地点の目俣遺跡でも縄文時代晩期の土器片が出土しており、これらの遺跡との関連性も注目される。

③中世遺構

第1面・新段階では、溜池と思われる大型土坑と素掘り井戸などを検出した。当地は平安時代以降に嶋下郡南部条里に基づく地割が展開し、耕作地として利用されているが、そういった耕作行為に関わる遺構であると思われる。

出土遺物は極端に少なく、時期が分かる遺物は僅かに鎌倉時代(13世紀代)に比定される須恵器甕の口縁部1点のみであり、この遺物をもって遺構面の時期を特定するには難しく、今後周辺地の発掘調査が進めば、さらに時期を限定できるであろうが、現時点では中世の遺構面と捉えておきたい。

なお土層断面観察により、第1面より上層部分において畦



第22図 建物配置図

畔断面が数ヶ所で認められた。これにより近世・近代を通じて、当地が耕作地として営まれ続けていたことが確認できた。

(2) 総括

上記の成果を、土地利用の視点から整理すると以下のようになる。当調査地は、元々池または湿地に接した微高地であり、草木が生い茂る環境であったと考えられる。

古墳時代前期(4世紀頃)には、地盤の安定した微高地上に集落が営まれていた。湿地状の微低地を臨む安定した微高地上に、集落を営んでいたことが窺える。

平安時代以降は、条里地割に沿って耕作地化が進み、その後近世・近代に至るまで耕作地として利用されたと考えられる。

【参考文献】

- 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編 1990『古墳時代の研究2・集落と豪族居館』 雄山閣
国立歴史民俗博物館編 1989『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集(共同研究「古代の集落」)
吹田市教育委員会 1985『昭和59年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』
吹田市教育委員会 2002『七尾東遺跡発掘調査報告書—第1次・第2次・第3次—』
地図資料編纂会編 2001『正式二万分一地形図集成・関西』 柏書房

第3章 中ノ坪遺跡第3次調査

1. 調査の経過(第23図)

当初、中ノ坪遺跡の周辺地であった当地で計画された住宅建築に際して、平成11(1999)年12月6日に立会を行ったところ、弥生時代の遺構・遺物が確認された。これにより中ノ坪遺跡の包蔵地が当地にまで広がることが新たに判明し、予定される建築工事が着工された場合、一部遺構・遺物が破壊されると判断されたため、事業者と協議を行い、遺跡の破壊の恐れのある部分について、発掘調査を実施した。

発掘調査は、平成11(1999)年12月15日から平成12(2000)年1月5日の間に実施した。調査区については予定建物の配置に合わせて設定し、面積は43.9m²である。また発掘調査開始に際しては、調査区の南に設定した任意の基準杭から、2m間隔で東西方向・南北方向に地区割設定を行った。

調査区の設定後、現代盛土層・攪乱層は重機を使用して掘り下げ、それより下層については人力により注意深く掘削した。そして遺物包含層を掘削した後は、地山面上において遺構検出作業を行い、検出遺構および遺物の出土状況などについて詳細に観察し、写真撮影や図面の作製などによる記録作業を行った。

2. 調査の成果

(1) 基本層序(第24図、図版15)

調査地の現地表面の標高は、概ね約5.3mである。調査区内の基本的な層序を、まとめて以下に記す。土層観察に際しては、地質注記の粒径区分は、アメリカ法によった。

各土層は、ほぼ水平な堆積状況が見られた。

第Ⅰ層：現代の盛土である。層厚50cmを測る。

第Ⅱ層：暗青灰色砂質シルト層。層厚14cmを測る。旧耕土である。

第Ⅲ層：明緑灰色粘土層。層厚14cmを測る。

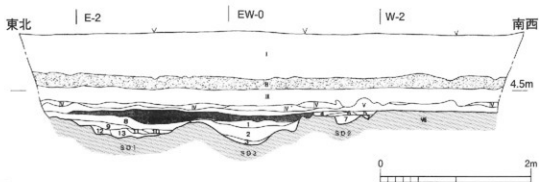
第Ⅳ層：灰色粘土層。砂粒を多く含む。層厚4cmを測る。二次堆積遺物であるが、古代の遺物を少量包含する。

第Ⅴ層：暗灰色粘土層。砂粒を多く含む。層厚3cmを測る。中世末～近世初頭の遺物を少量包含する。

第Ⅵ層：黒褐色粘質シルト層。砂粒を多く含む。層厚4cmを測る。主に弥生時代中期後半から古墳時代終末期までの遺物を包含する。



第23図 調査区配置図



南壁断面

<基本層序>

- I : 現代の盛土層
- II : 暗青灰色砂質シルト層 (旧耕土)
- III : 明緑灰色粘土層
- IV : 灰色粘土層
- IV' : 暗褐色砂質粘土層
- V : 暗灰色粘土層
- V' : 暗灰色シルト質粘土層
- VI : 黒褐色粘質シルト層
- VII : 明青灰色粘土層 (地山)

<SD3埋土>

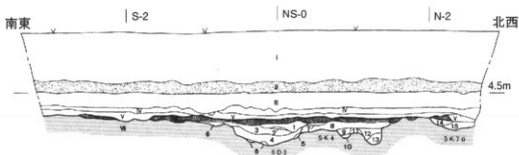
- 1 : 黒褐色粘土 (VIよりも暗い)
- 2 : 黒色粘土 (軟質)
- 3 : 黒褐色粘土 (軟質)

<SD2埋土>

- 4 : 黒褐色粘土
- 5 : 黒褐色砂質粘土 (明青灰色粘土ブロックを含む)
- 6 : 黒褐色粘土 (明青灰色粘土ブロックを含む)
- 7 : 灰色シルト (明青灰色粘土ブロックを含む)

<SD1埋土>

- 8 : 黒色粘土
- 9 : 黒褐色粘土
- 10 : 黒色粘土 (8より黒い)
- 11 : 黒褐色粘土 (褐色粘土粒を多く含む)
- 12 : 黒褐色粘土 (明青灰色シルトブロックを多く含む)
- 13 : 黒褐色粘土



西壁断面

<SD2埋土>

- 1 : 黒色粘土
- 2 : 褐色シルト (明青灰色シルトブロックを含む)
- 3 : 黒色粘土
- 4 : 黒褐色粘土
- 5 : 黒褐色粘土 (明青灰色シルト亜円形ブロックを含む)

<SD1>

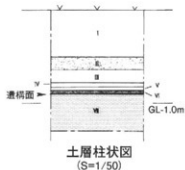
- 6 : 暗灰色粘土 (黒褐色粘土ブロックを含む)

<SK4埋土>

- 7 : 黒褐色粘土 (VIよりも黒い)
- 8 : 黒褐色粘土 (7よりさらに黒い)
- 9 : 黒褐色粘土 (11よりも暗い)
- 10 : 黒褐色粘土 (明青灰色粘土三角形ブロックを多く含む)
- 11 : 暗褐色シルト
- 12 : 黒褐色シルト
- 13 : 黒褐色シルト (明青灰色シルト角形ブロックを含む)

<SK70>

- 14 : 灰色粘土 (明青灰色粘土粒を密に含む)
- 15 : 黒褐色シルト質粘土



第24図 土層断面図

第Ⅶ層：明青灰色粘土層。遺構面を形成し、遺物は包含しない。地山層である。

(2) 検出遺構と遺構出土遺物(第25図、図版13・14)

発掘調査では第Ⅶ層上面をベースとし、弥生時代・古墳時代終末期・平安時代以降と思われる3時期にわたる遺構を検出した。遺構面は、現地表から約1.0～1.1mの深さ、標高約4.3m前後である。検出遺構は、溝3条、土坑およびピット79基を数える。

検出遺構には一連の番号を付け、その前にSD：溝、SK：土坑、P：ピット、SX：不明・その他などの分類記号を付記する。以下、順を追って各遺構と主な遺構出土遺物を記す。

溝SD1(第26図、図版14)

平面形が「コ」字形に巡る溝で、調査区外の東側へと展開する。幅0.48～1.16m以上、深さは最深部で54cmを測り、断面形は逆台形を呈する。ただしコーナー部では土橋状に幅60cm前後、深さ5cm前後と浅くなる。埋土に流水痕は認められなかった。

この溝に区画される空間内は、平面形が東西3.39m以上×南北4.6mを測る隅丸方形を呈し、地盤が周囲よりも僅かに4cm程度高い状況が見られた。

埋土中から弥生土器壺または甕(1・2)、土錘、サヌカイトの剥片などが出土した。1は底部1/2からの反転復元で、底径6.4cm、残存高3.8cmを測る。2は底部1/4からの反転復元で、底径6.4cm、残存高6.4cmを測る。ともに畿内第Ⅳ様式に相当し、弥生時代中期後半の所産である。

溝SD2(第26図、図版14)

SD1から分岐する格好で、平面形が「L」字形に巡る溝で、調査区外の南側から西側へと展開するようである。幅1.12m以上、深さ10cmを測るが、SD3との重複部分が多いため、正確な規模・形状は不明である。断面形はやや不定形ながらも逆台形に近い。埋土に流水痕は認められなかった。この溝に区画される空間は、東西1.78m以上×南北1.44m以上を測る。埋土中から土師器高坏(3)、須恵器坏蓋、石鏝(7)が出土した。

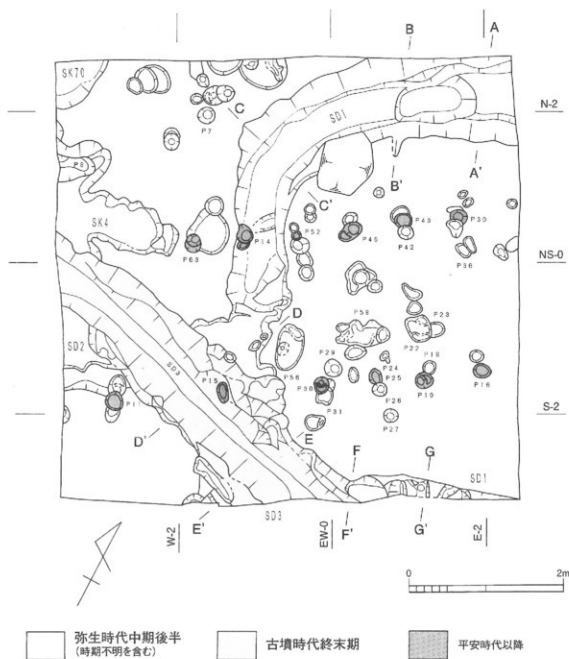
3は土師器高坏の坏部である。口縁部1/4の破片からの反転復元で、口径22.2cm、残存高7.2cmを測る。古墳時代前期(4世紀代)の所産である。7はサヌカイト製の凹基無茎鏝である。基部に僅かな欠損があるがほぼ完形で、長さ2.2cm、幅1.5cm、厚さ3.5cmを測る。縄文時代の所産である。

溝SD3(第26図、図版14)

概ね東西方向に直線的に走向する。幅1.13～1.2m、深さ35～43cm、主軸方位はN76°Wを測り、断面形はU字形を呈する。埋土に流水痕は認められなかった。

埋土中から弥生土器、土師器高坏、須恵器坏蓋、石鏝、サヌカイトの剥片などが出土した。遺物の下限年代は、古墳時代後期～終末期(6世紀～7世紀前半)である。

なおSD1とSD2の先後関係であるが、両者をSD3が分断する格好で掘削されているために不明である。但し両遺構の埋土は、ほぼ同質であった。



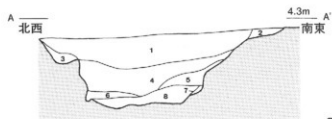
第25図 遺構平面図

畦畔SX 1 (第27図、図版14)

SA 2・SA 3の2列ピット列で構成される。2列のピット間隔は2.0~2.1mを測り、概ね平行である。ピットの平面形は概ね円形で直径12~30cmで、深さ3~15cmを測り、一部を除いて浅いものが多い。各ピット同士は60~70cm間隔である。埋土は灰色粘土で、第Ⅲ~Ⅴ層に近く、遺構面よりも上層からの掘り込みと考えられる。

このうちSA 2は、P63・P13・P52・P46・P43・P38・P78で構成される。主軸方位はN57°Eである。一方のSA 3は、P11・P15・P30・P25・P19・P16で構成される。主軸方位はN58°Eである。なお各ピットはいずれも2~3基のピット同士で重複関係にある。

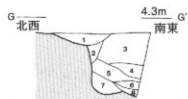
SA 2 (P63)の埋土中からは、弥生土器の小片が少量出土し、SA 3 (P16・P19)の埋土



SD1 (Aセクション)

1. 黒色粘土 (軟質、明青灰色亞円形粘土粒を少し含む)
2. 暗褐色粘土 (円形粘土ブロックが密に入る)
3. 黒色粘土 (明青灰色粘土ブロックを含む)
4. 黒色粘土 (軟質)

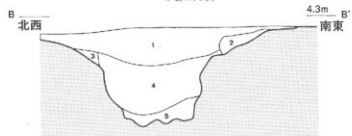
5. 黒褐色粘土 (軟質、明青灰色円形粘土粒を少し含む)
6. 黒褐色粘土 (軟質、淡黄色~明青灰色円形粘土小型ブロックを含む)
7. 黒褐色粘土
8. 暗灰色粘土 (軟質、淡黄色~灰白色~黒褐色小型粘土ブロックが密に入る)



SD1 (Gセクション)

1. 暗灰色粘土 (灰色角形粘土ブロックを含む)
2. 暗灰色~黒褐色~明青灰色 (亞角形粘土ブロックを含む)
3. 黒色粘土
4. 黒色粘土 (3より黒い)

5. 黒褐色粘土 (褐色粘土亞円形粘土粒を多く含む)
6. 黒褐色粘土 (5と同質のブロックを少し含む)
7. 黒色粘土 (褐色亞円形粘土粒を少し含む)
8. 黒色粘土



SD1 (Bセクション)

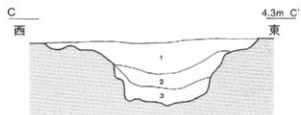
1. 黒色粘土 (硬質)
2. 黒色粘土 (にぶい黄色粘土亞角形ブロックを含む)
3. 黒色粘土 (灰白色亞円形粘土ブロックを含む)

4. 黒色粘土 (軟質)
5. 暗灰色粘土



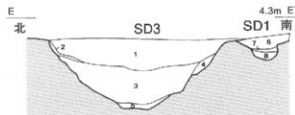
SD1 (Fセクション)

1. 黒色粘土
2. 黒色粘土 (1より暗い)
3. 暗褐色シルト (明青灰色シルト亞角形ブロックを密に含む)



SD1 (Cセクション)

1. 黒褐色粘土 (硬質)
2. 黒色粘土 (軟質・粘性強い)
3. 黒褐色粘土 (明褐色粘土ブロックを含む)



SD3 (Eセクション)

1. 黒色粘土 (硬質)
2. 暗灰色粘土 (明青灰色粘土亞円形ブロックを多く含む)
3. 黒色粘土 (軟質、炭粒を含む)
4. 黒褐色粘土 (明青灰色亞円形粘土ブロックを含む)
5. 黒褐色シルト (亞角形粘土ブロックを含む)

SD1

6. 黒褐色粘土
7. 灰色シルト
8. 暗灰色シルト



SD3 (Dセクション)

1. 黒色粘土 (硬質)
2. 黒褐色シルト (明青灰色粘土亞角形ブロックを含む)

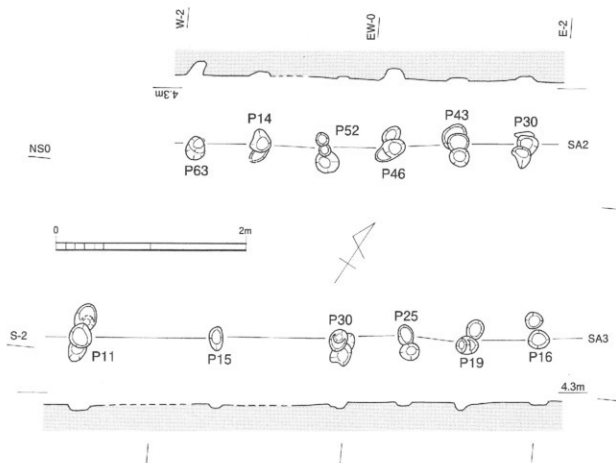
3. 黒褐色粘土 (亞円形粘土ブロックが密に入る)
4. 黒色粘土 (軟質)
5. 黒褐色シルト (明青灰色シルト亞角形ブロックを密に含む)
6. 黒褐色シルト (明青灰色シルト亞角形ブロックを含む)

SD1

7. 黒褐色粘土
8. 黒色粘土 (明青灰色粘土角形ブロックを含む)
9. 黒褐色粘質シルト



第26図 SD1・SD3断面図



第27図 SX1平面・断面図

中からは、弥生土器、土師器の小片が少量出土した。

(3) 遺物包含層出土の遺物(第28図)

遺構埋土および遺物包含層中から、コンテナ1箱の遺物が出土した。その内訳は弥生土器・土師器・須恵器・石器・瓦などとなる。

以下では遺物包含層出土分のうち、特徴的なものを中心に紹介する。なお各土層出土遺物の下限年代は、第I層が現代、第II層が近世～近代、第III層は不明、第IV層は古墳時代(二次堆積遺物)、第V層が弥生時代(二次堆積遺物)、第VI層が古墳時代終末期(7世紀中頃)である。

第II層(暗青灰色砂質シルト層)

丸瓦が2点出土したが、いずれも図化困難な小片であった。ともに内面の粘土切り手法は、鉄線引きによるコビキB類であった。安土桃山時代後半～江戸時代初頭(16世紀末～17世紀前半)の所産である。

第IV層(灰色粘土層)

土師器、須恵器甕・壺・坏、サスカイトの剥片などが出土したが、いずれも図化困難な小片であった。

第V層(暗灰色粘土層)

弥生土器、サスカイトの剥片などが出土したが、いずれも図化困難な小片であった。

第Ⅵ層(黒褐色粘質シルト層)

弥生土器壺または甕(4・5)、土師器甕・高坏、須恵器甕(6)・坏蓋、石包丁、石鏃(8)、搔器(9)、サヌカイトの剥片などが出土した。

4は底部1/2の破片からの反転復元で、底径7.5cm、残存高2.8cmを測る。5は底部1/4の破片からの反転復元で、底径7.4cm、残存高3.2cmを測る。ともに畿内第Ⅳ様式に相当し、弥生時代中期後半の所産である。

6は口縁部1/14の破片からの反転復元で、口径23.2cm、残存高5.0cmを測る。高蔵217～高蔵46型式に相当し、古墳時代終末期(7世紀前半～中頃)の所産である。

7はサヌカイト製の凸基無蓋式石鏃である。基部が欠損し、長さ4.5cm、幅1.1cm、厚さ3.5cmを測る。弥生時代中期の所産である。

9はサヌカイト製のスクレイパー(搔器)である。一部に原礫面を残し、長さ5.8cm、幅5.2cm、厚さ3.2cmを測る。

【参考文献】

(財)大阪府文化財センター編 2006『古式土師器の年代学』

鈴木道之助 1991『図録 石器入門事典』縄文編 柏書房

田辺昭三 1981『須恵器大成』 角川書店

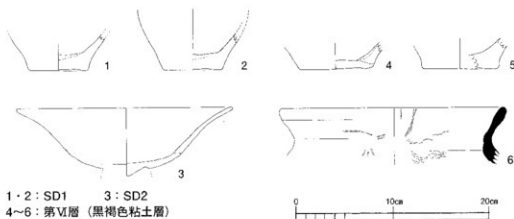
寺沢茂・森岡秀人編 1990『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社

原田昌明 1993『久宝寺遺跡第1次調査(KH84-1)』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会

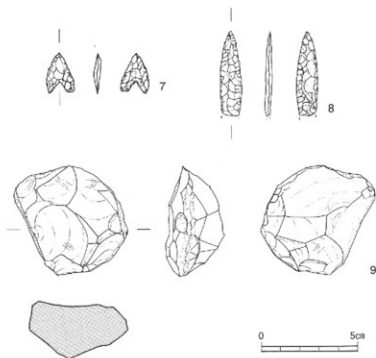
3. まとめ

(1) 遺構の変遷

今回の発掘調査では、多数の遺構を検出した。これらは各遺構同士の重複関係から、SD1・SD2→SD3→SX1(SA2・SA3)の順で新しくなり、3時期の変遷を追うことができる。また出土した土器の年代から、SD1・SD2は弥生時代中期後半、SD3は古墳時代



第28図 出土遺物実測図



第29図 石器実測図

7 : SD2
8・9 : 第Ⅴ層

近で溝底が浅くなる点が陸橋を想起させる点などが、その可能性を強くした。そのため、方形区画内にサブトレンチを設定して、埋葬施設の痕跡が残存していないか、また溝内に共献土器の出土状況がないかを丹念に精査した。しかし埋葬施設らしき痕跡は確認することができず、溝内からは土器片が散在的に出土するのみで、1箇所にとままって出土する状況は認められなかった。したがって方形周溝墓と断定する決定的な根拠は得られなかった。それでも2つの区画が溝を共有して並ぶ様相が、方形周溝墓群を連想させることから、その可能性はまだ残ると考える。

②古墳時代遺構

SD3がこれに相当する。古墳時代後期または終末期(6世紀～7世紀前半)に比定される。この溝の用途は不明であるが、埋土に流水痕が認められないことから、水路や自然流路などの可能性は低いと思われる。

③平安時代以降の遺構

SX1が平安時代以降に相当しSA1・SA2の2列のビット列で構成される。ビット埋土中から弥生土器や土師器の小片が出土しているが、重複関係から見て今回の検出遺構の中では最も時期が新しい。また埋土も、第Ⅲ層～第Ⅴ層に近い様相を示す。主軸方位は概ねN58°Eで、嶋下郡南部条里の東西地割方位とはほぼ合致することから、少なくとも平安時代かそれ以降の条里地割に関わる遺構と見られる。2列の杭列幅は約2mでありこれを1間として捉えると、何らかの関連性が見取れ、単独の2列の柵列と考えるよりも、両者一体の作事物の可能性が高いように思われる。

用途としては、条里地割にのっとった杭と矢板で土留めされた水田畦畔や、畦畔を利用した里道などが考えられる。各ビットは、いずれもが同一地点において2～3個同士が重複し合っ

後期または終末期に比定することができる。SX1は条里地割との関わりから、平安時代かそれ以降と推察される。以下では、時期別に主要遺構の概要を記す。

①弥生時代遺構

SD1・SD2及びこの溝によって区画される方形区画が、弥生時代中期後半(畿内第Ⅳ様式)に相当する。

この方形区画は、遺構検出当初より方形周溝墓の可能性が考えられた。区画内が周囲の地盤よりも僅かに高いことや、コーナー部付

ていることから、同一地点で何回かの修築が行われたことを物語っている。

類似の遺構は、大阪府文化財センターが平成19(2007)～20(2008)年に実施した、吹田操車場遺跡の調査でも出土している。検出された2列のピット列は、報告書では2条の「柵列」としているが、条里地割と同一方向であることから、杭と矢板で土留めした畦畔などの施設の可能性が考えられる[大文セ2010]。また時期は異なるが、垂水南遺跡第8次調査で検出された古墳墳時代の水田畦畔や[市史編さん委員会1981]、高城B遺跡第1次調査で検出した近世以降の「亀岡街道」のように[吹田市1999]、両側に矢板や杭列を伴う同様の遺構が検出されている。

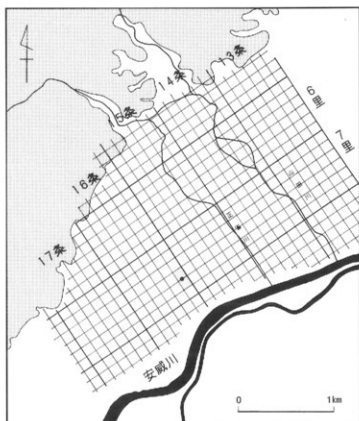
それではこの遺構は、条里地割の一体どの辺りに位置するのであろうか。同条里地割については、高橋真希が復元を試みている(第30図参照)。同条里復元図上に今次調査地点を重ね合わせてみると、当調査地北側の「16条7里24坪」と南側の「16条7里25坪」を隔てる境界線上に位置することになる[高橋ほか2010](図中網掛けとドット部分)。加えてほぼ約1間幅という規模を考慮すると、SX1は坪境の畦畔である可能性が高いように思われる。SX1は坪境の畦畔として機能し、そのため同一地点で何度も修復されて、長く使用され続けたものと推測できる。

(2) 総括

今次調査では弥生時代中期後半・古墳時代後期～終末期・平安時代以降の、3時期にわたる遺構を検出した。中ノ坪遺跡の既往調査では、これまでに弥生時代後期・古墳時代・平安時代・中世の遺構・遺物などの存在が知られていた。今回の遺構の確認は、さらに弥生時代中期後半から、岸部南地域一帯において人々の営みが継続的に行われていたことを物語っている。

【参考文献】

- 吹田市史編さん委員会編 1981『吹田市史』第8巻 吹田市役所
- 吹田市都市整備部・吹田市教育委員会 1999『高城B遺跡』
- 高橋真希ほか 2010『災害から地域遺産をみなおす—吉志部神社の復興—』吹田市立博物館
- 福留照尚 1989『吹田地方の条里制』『吹田市史』第1巻 吹田市史編さん委員会



第30図 嶋下郡南部条里と中ノ坪遺跡
(高橋2010原図を基に作図) ドットは第3次調査地

報告書抄録

ふりがな	なかのつばいせきはつつちょうさほうこくしょⅠ
書名	中ノ坪遺跡発掘調査報告書Ⅰ
副書名	第1次・第3次発掘調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	堀1健二
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-8550 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL(06-6384-1231)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯 °′″	東 経 °′″	調査期間	調査原因	調査面積
		市町村	遺跡番号					
なかのつばいせき 中ノ坪遺跡	(第1次) 吹田市岸部南3丁目 757-1、-2、758-2、-3の 一部、-4の一部	27205	97	34° 46′ 19″	135° 32′ 28″	(第1次) 19970616～ 19970731	(第1次) 446.7	記録保存 調査
	(第3次) 吹田市岸部南3丁目 183-1の一部					(第3次) 19991215～ 20000105	(第3次) 43.9	

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
中ノ坪遺跡	集落遺跡	(第1次) 縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世 (第3次) 縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代 以降	なし なし 掘立柱建物、櫓列、柱穴、 土坑、ピット、溝 池、井戸	縄文土器、石鏃 弥生土器 土師器、須恵器、 柱根、礎板 須恵器	なし なし

図版 1 第1次調査 第1面全景(1)



H区 (北から)



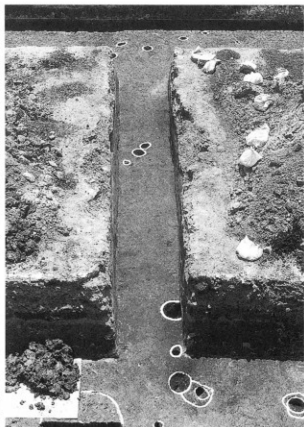
A区 (北から)



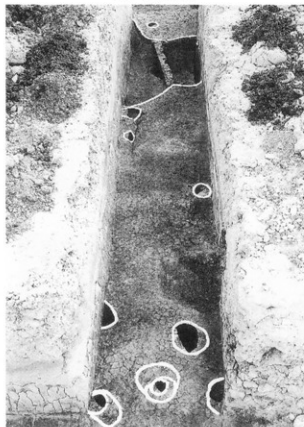
G区 (北から)



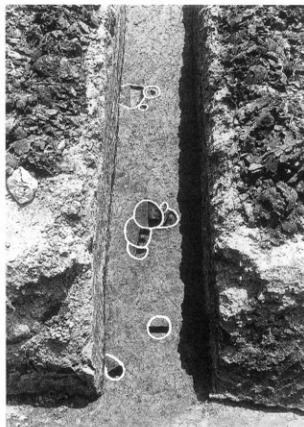
B区 (西から)



C区 (東から)



D区 (東から)



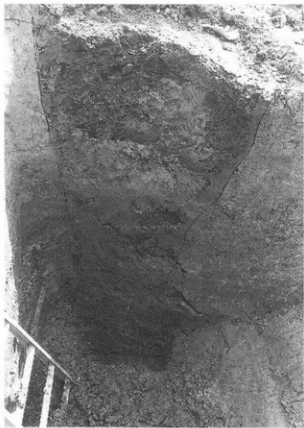
E区 (東から)



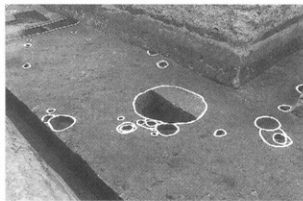
F区 (東から)



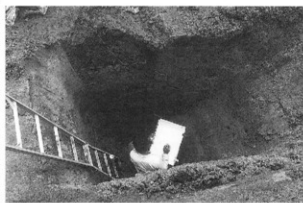
I区 (東から)



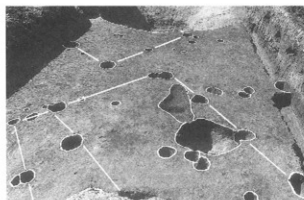
SE200断面 (東から)



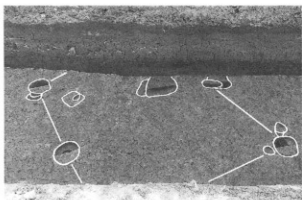
G区 SE200 (中央の土坑・北から)



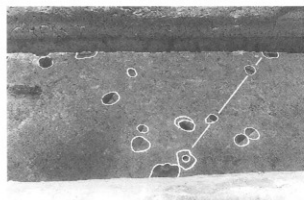
SE200実測作業



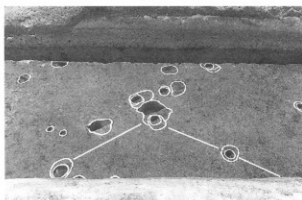
H区 SB1(奥)・SB2(手前)



A区 SB4 (東から)



A区 SA3 (東から)



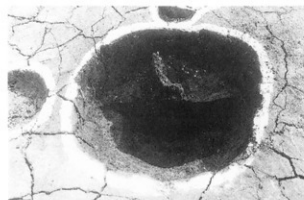
A区 SB6 (東から)



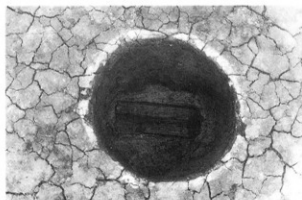
SB2・P298柱根 (北から)



SB2・P314柱根 (北から)



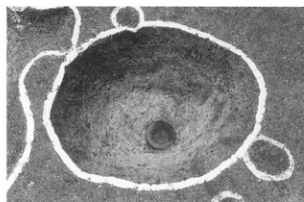
SB4・P95柱根 (西から)



SB4・P85礎板 (西から)



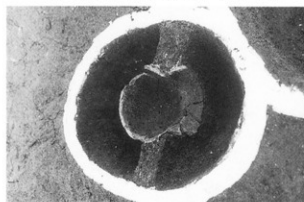
D区 SK241 土師器 (9・16) 出土状況



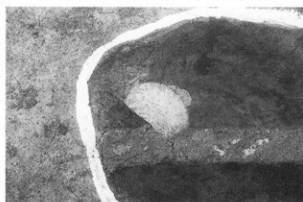
G区 SK178 弥生土器 (3) 出土状況



H区 SK403 土師器 (8) 出土状況



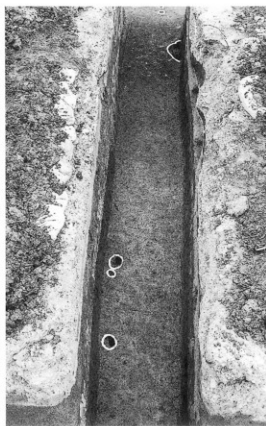
G区 P17 土師器出土状況



A区 SK107 須恵器 (17) 出土状況



G~H区 (北から)



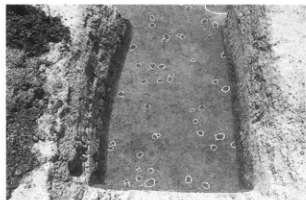
C区 (東から)



A区 (南から)



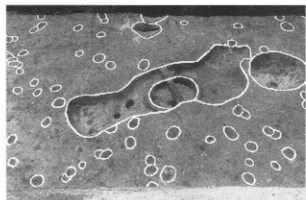
D区 (西から)



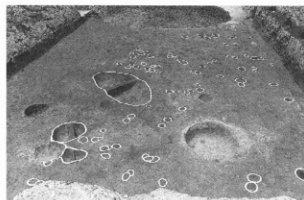
I区 (東から)



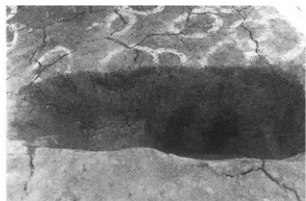
G区南端 (東から)



G区 P502・SK503 (東から)



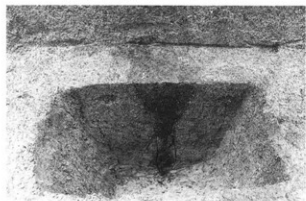
H区 P508・SK510 (南から)



A区 小ビットA群 (東から)



A区 小ビットB群 (西から)



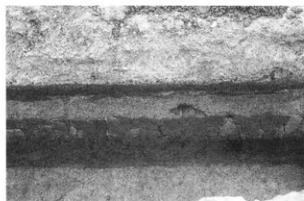
I区 小ビット (東から)



I区 小ビット (北から)



A区 西壁断面



C区 北壁断面



G区 南壁断面



G区 東壁断面



I区 北壁断面



ショベルカーによる表土除去作業



人力による土層掘削



遺構の検出作業



写真撮影用の白線引き



遺構の写真撮影



遺構図作成 (平面実測)



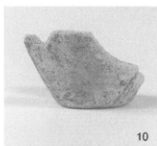
遺構図の作成 (断面実測)



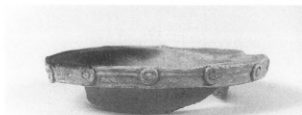
SK241の遺物取り上げ



1



10



3



6



12



22



9



13



8

1 : SK116

9・10・12・13 : SK241

3 : SK178

6・8 : SK403

22 : SK312



17



24



18



32

33

25



36



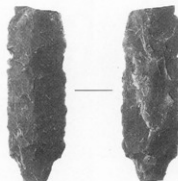
38



39



37



34



35

17・18: SK107
36: SB2 (P298)
34: SK278

24: 試掘
37: SB2 (P314)
35: 第Ⅵ層

25: 第Ⅱ層 32・33: 層位不明
38: SB4 (P95) 39: SB4 (P85)



北から



西から



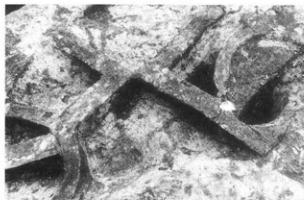
SD1 (南から)



SD3 (東から)



SX1 (東から)



ビット群細部



ビット群細部



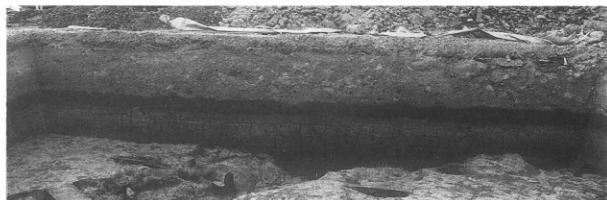
石(8)出土状況 (遺構面直上)



挿器(9)出土状況 (遺構面直上)



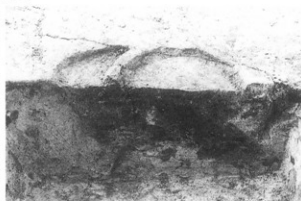
南壁断面



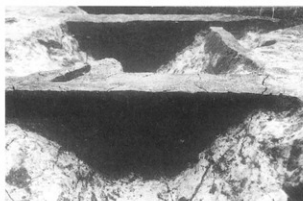
西壁断面



SD1セクションベルト



P9 (東から)



SD3セクションベルト



P29 (南東から)



ショベルカーによる表土除去作業



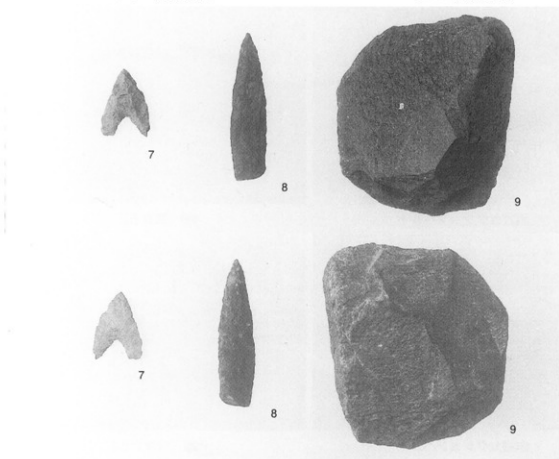
遺構図の作成 (平面実測)



ビットの検出作業



SD1の検出作業



7 .. SD2
8 . 9 .. 第VI層

中ノ坪遺跡発掘調査報告書Ⅰ

－第1次・第3次発掘調査－

平成24(2012)年3月31日

編集 吹田市泉町1丁目3番40号

発行 吹田市教育委員会

この報告書は300部作成し、一部当たりの単価は672円です。

